

## 「ブリッジの家」

### 名作ブリッジ住宅「住吉の長屋」

ブリッジを持つ住宅は、多数とは言えないものの世に少なからず存在しています。

その中で最も有名なものの一つとして安藤忠雄氏設計「住吉の長屋」が挙げられます。単純にして大胆なプラン、禁欲的な意匠、周囲から隔離された別世界のような中庭、そしてブリッジ。単によく出来た設計の範疇を越え、都市に対する批評であり最小限の生活の提案であり、同時にそれらが不可分のものとして見事に一つの形態に結実しています。これほど傑作としての条件を備えている作品もそう多くはありません。

## 「ブリッジの家」

余談ですが、筆者が建築家として

実作の経験を積むにつれ気付いたこととに「住吉の長屋は面白い」という点があります。あるいは「傑作に必要だ」と言い換えてもいいかも知れません。

表現の多くを作者の内面に依る純粋芸術と異なり、建築では敷地やクライアントのキャラクター、予算の制約など、設計者の力ではどうすることも出来ない問題が数多く存在しています。これらの条件を建物に上手く取り込めるかどうかは建築家の腕の見せ所であることは間違いありませんし、時としてこれらがインスピレーションの源となることもあります。

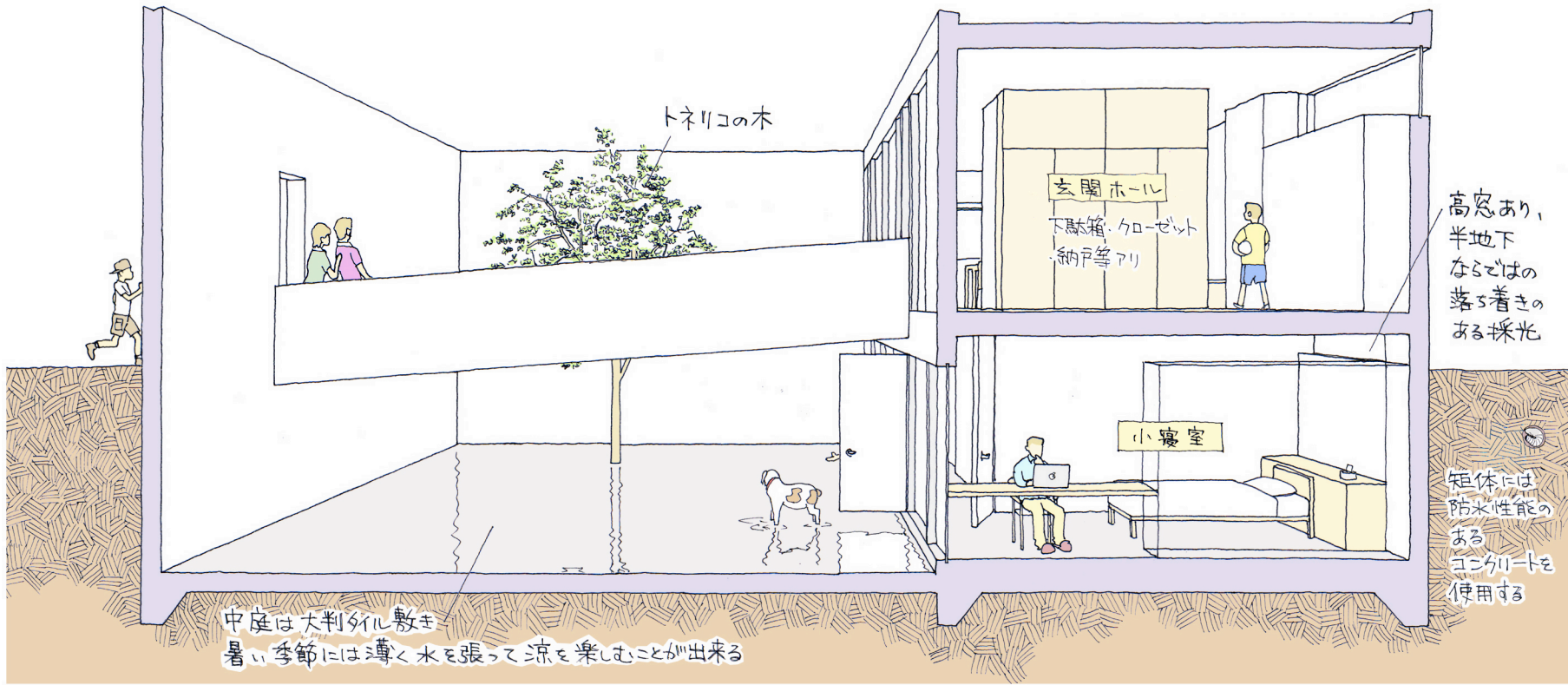
ます。その一方で、素晴らしいアイデアだけでもほんのちよつとした条件の違いが原因で良さが生かされない・・・ということもしばしば起こり得ることなのです。

例えば「住吉」は木造三軒長屋の真ん中をコンクリートで置き換える計画だったのですが、これがもし三軒の端っこだったら、果たして現在のような名作らしい印象が生まれていただでしょうか？あるいは長屋が四軒だったとしても、その見事な図式的整合性にはケチがついていたかも知れません。実務を重ねてこのような名作になりきれない条件を目にする機会が増えるたびに、「住吉」を支える重要な条件の一つに「運のよさ」というものがあることは紛れもない事実だと感じるようになりました。もちろん、安藤氏に運を生かす確かな実力があつたことは言うまでもありません。

### 「住吉の長屋」への対策

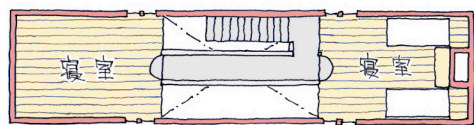
さて、様々な面から賞賛を受けてい

「ブリッジの家」		敷地面積	588.00m <sup>2</sup>
用途	専用住宅	建築面積	169.00m <sup>2</sup>
階数	地上1階、地下1階	床面積	128.00m <sup>2</sup>
構造	鉄筋コンクリート造	総工費	?
家族	夫婦+子供1人		

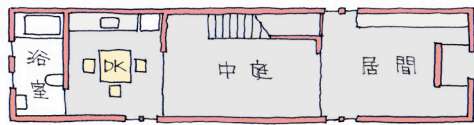


高窓あり、半地下ならごはの落ち着きのある採光

躯体には防水性能のあるコンクリートを使用する



1階平面図

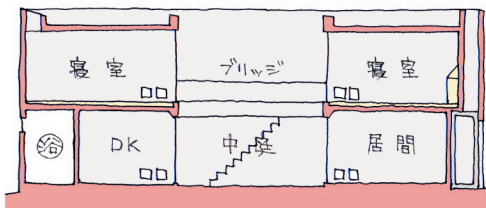


2階平面図

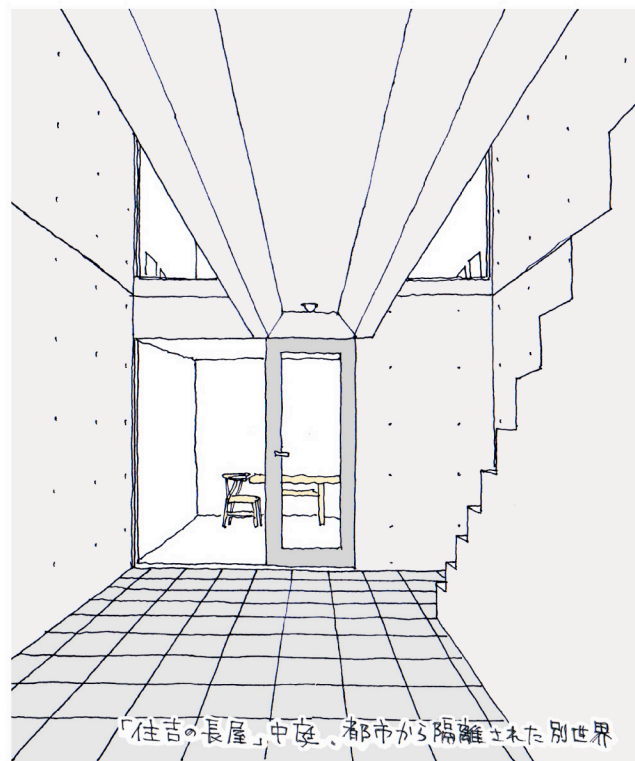


三軒長屋

「住吉の長屋」  
どのほどの建築家が  
このプランを参照したことが



断面図



「住吉の長屋」中庭、都市から隔離された別世界

いる「住吉の長屋」ですが、一方ではその過激な割り切りに対しては批判も多く、アンチテーゼの対象となることでもよく知られています。私自身、中庭式の住宅を依頼される事がありますが、その場合でもまず

外界とのコミュニケーションを壁で遮断することから始めるようなやり方は極力避けたいと考えています。それにも関わらず壁で周囲を遮断した中庭式住宅を依頼されたらどうなるか「ブリッジの家」は実際

にあった、そのような事例に基づいて計画されました。つまり「住吉の長屋」のような形式が期待された依頼に対する、私なりの対策だと言えるでしょうか。一方で依頼の敷地は「住吉」よりずっと広く、要求される部屋数も多かったため生活批評としての性質は薄くなっており、どちらかと言えば贅沢な装置として中庭が求められていた点は大きく異なっていました。

このように建物の背景やサイズが変化すると、「住吉の長屋」では問題にならなかった部分が気になって来ます。それは一階に居間などパブリック性が高くお客さんが来る可能性のある空間が用意されており、プライベート性の高い寝室が二階に配置されているという点です。

必要なのかどうかは少し疑問に感じられます。また、壁に囲まれた事で中庭はどうしても暗くなりがちで、その傾向は下層階ほど顕著になります。このような条件において、なおパブリックな機能を二階に置き続けることが妥当なのかどうかには首を傾げざるを得ません。単純に考えて、家族が集いお客さんも足を踏み入れるパブリックな部分は明るい空間が、各自がそれぞれ使用するプライベートな部分はやや落ち着いた空間が望まれる筈です。以上のような背景から、「一階と二階をひっくり返し、二階から入る中庭の家」が案として検討されることになりました。

このことは一般的な住宅の構成と比べて非常識なものではなく、違和感を抱かれない方も多いかも知れません。玄関など外界との接点により近い一階にパブリックなスペースを置き、プライベートなスペースはそこから遠ざけることでプライバシーを保護してやるのはむしろ常識的なやり方で、この点に限って言えば「住吉」は非常にオーソドックスな住宅だということが出来ます。

しかしながら、よく考えてみるとこのようなプライバシー上の配慮が壁に囲まれた中庭式の住宅に対して

「住吉の長屋」では、半階分上がつた玄関へ人間を自然に導く要素が

下室にならずに済みます。